トコトワ新聞

中央校

第２１号

水無月（ミナツキ）に
ミズの流れの
うるおい満ちて

ユルアナのトキ…。

桜の花が終わると、どこからともなくカエルの声が聞こえ始め、田んぼは耕され、水がはられて田植えのトキを迎える。年々早くなる田植えは、山手の田んぼからだんだんと里へとトキを変えていく。水の流れにしたがって上から下へと、まるで田植え前線かのように。

田畑仕事は結構な肉体労働で、小さな頃はお手伝いが嫌だったものです。今も大好きとは言えません。ただ、父・母が懸命にしていることをほんの少しでも分かち合えたら、と思っています。

我が家の田畑は、小さな山々に囲まれた、山しかないところにあります。中には、日本アルプスが見える所があったりと美しい所です。父はこの地が大好きで、友達や親戚が遊びに来るたび、田畑めぐりドライブに案内します。父の自慢の地なのです。私も大好きです。生まれ育ったこの地だからなのか？…愛しいのです。

その理由の一つは、ご近所の方たちがいてくださることです。七〇歳近くのおじいさん・おばあさんだったりもしますが、とても元気で、田畑仕事を本当によくされています。

とれたて野菜が玄関先にポッと置かれていたり、手打ちのうどんが届いたり、年寄りが一人でいるから様子を見てほしいと頼まれて若い者たちが出掛けたり、ちょっと息抜きにお茶飲みに行ったり来たり。

それぞれの家が食べられる分の野菜を作っているわけなのですが、その家によって収穫の時期が異なったり、種類に違いがあったりします。それぞれがそれぞれを為し、かつ近所という和を大切に思い合える、お互いでありがたく頂き合えるのが常だから、ずっと続いているのかなあと感じます。

このことは、私にはサイワイ村の香りへと夢拡がります。

そして、かけがえのない家族があります。父が愛するこの地、嫁いできて初めての農作業を懸命にこなす母、近所づきあいのかなめの祖母。この家族の心根を、私は継いでいきます。父のように、母のように、祖母のように……。

どれだけ担えるかなんて、とても分かりません。ただ、なきものにはできないのです。

『愛したい』この地と共にただそのことを、華の咲くトキをずっと待ちます。

仲間という多くの神々からのエールを胸に。

ハーモニールーム　ユルアナ

小林　幸美

愛娘の嫁ぐ日

二〇〇二年の今年に入って、喜びの日がありました。

それは、三〇年以上も一緒に暮らしを共にしてきました愛娘が素敵なお相手を家に連れてきた時です。

夫と二人で仕事を終わらせて、急いで家に帰っていき、どんな方かと心を弾ませたりソワソワしたりで、部屋の中をウロウロする夫と私でした。

親の転勤で幼い頃から学校生活などを転校生として体験し、中学時代（中学三年生）には、親から離れて東北（宮城県塩釜）の私の実家から、中学・高校と生活をしている中で、祖父や祖母や周囲の方との交わりなどを学んだり、成長していく過程で精神の強さも身についたものがたくさんあったようです。

その途中で父親の突然の病気、それも脳梗塞で右半身が不自由となった親を、いつもそばで気を遣いながら見つめていたのでしょう。母親の私には、そんな娘の暖かさに胸が熱くなることがしばしばありました。

成人（二〇歳）過ぎてからの娘は、一つ一つ足元をしっかりと築きながら歩いていくのを感じていました。

知り合いに会うと、「そろそろお宅の娘さんも、結婚の年齢になりましたね」と言われてハッとしました。主人の病気で頭がイッパイで気持ちにゆとりのない私でしたが、もうそんな年齢であるんだと、思わず私が結婚した年を考えていました。

いつまでも娘と共に生活してはいけないんだナァーと、主人といつも話してはいました。良い方と巡り会えればいいなと。これもご縁ですから……、と言いながら。

知り合いからお相手を紹介されて、娘に話をすると、「私はまだ勉強したいから、一人で生きて行くから。」とお断りをしていました。時折家族で、多母さんの研修会や講演会などにも参加もしました。

夫も私も、良き人があったら、いつでも連れてきて欲しいと言っていましたし、また夫はいつも、「人生で自分で決断することが三つある」と口

癖で言っていたことがあります。それは、①進学、②就職と、③結婚でした。私は、「いつもにこやかで、笑顔は絶やさないで、優しさと思いやりのある、そしていつも初心を忘れないこと」でした。

そんな娘が、「お母さん、私ね、結婚式の時に着る姿はね、白無垢で綿帽子にすることにしたのよ。」と嬉しそうに話してくれました。やっと愛娘のお嫁入り姿が見られるんだナァーと、そして今度からは今までと同じように、何か用事があっても、気軽に声をかけられなくなるのかなーと思ったりしました。でも私も夫も、やっと娘の前に良い人が現れたんだなぁと、大いに喜んであげることだと手を取り合いました。

今は亡き私の父も、孫である娘の晴れ姿を心待ちにしていて、亡くなる前に娘に「早くいい人、見つけろよ」と話かけていたのをこっそり聞いていましたので、さぞ草葉の陰で喜んでくれていることでしょう。

親の私たちは、娘からたくさんの思いやりと援助を頂きました。どちらが親だか分からない程です。今回の結婚式を決めるに当たっても、私たちの仕事や健康を気遣い、家からも職場からも近くて便利な塩釜神社にしてくれました。（その昔、私たちが結婚式を挙げたのもここであり、ほぼ同じ桜の季節であり、その時の印象が強い親類と私たちは、感激と感謝でいっぱいでした。）

平成十四年四月二十七日（大安）の日、お式の前に待合室で、綿帽子被ってうつむいて座っている愛娘を見て、わが娘ながら『なんと美しく純粋で神々しいこと』と立ち尽くしてしまいました。そして、いつまでもいつまでも初心を忘れないでいて欲しいと思い、祈りました。

その昔、私が嫁いで行くときに母親から頂いた言葉は、「貴女は、お相手の方にお返しするんだよ。今までは、母が貴女を育てさせて頂いたんだから。」と話してくれました。

今の私は、母が言った言葉の通り、貴女を大事に育てさせていただきました。

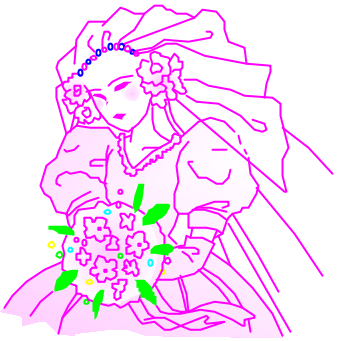
これからは、何事も二人で相談し、助け合い、温かな家庭を築いて行ってください。私たちは、彼を貴女の大事な伴侶であり、また息子と思っていますので、楽しく自然なお付き合いをさせてもらおうと思いますので、宜しくね。

私たち夫婦には、共通の趣味として川柳があります。この度のこの娘の結婚に関して、二～三作句したので、ご披露してこの稿を終わりたいと思います。

嫁ぐ娘に　贈る言葉を　あれこれと

綿帽子の　笑顔に応えて　うなずいて

晩生の娘　やっと嫁いで　ビール飲む

ハーモニールーム　ロミホ

松本　美智子